

地域「里親」による 医学生支援プログラム

地域医療を担う
医師・看護師の育成をめざす
地域参加型の学生支援



国立大学法人
滋賀医科大学

里親学生支援室
室長 埜田和史

- 光ファイバーの普及率
10.7%と、日本一
- 県庁所在地一人あたり、「肉」消費量、日本一
- 人口増加持続予測、日本一

滋賀県をご存知ですか？



- 乳児死亡率、出生1000人あたり3.5人で、全国最大
- 産婦人科医師数、15～49歳女性10万人あたり、26人で、全国最少
- 医師数、人口10万あたり191人で、西日本最少
(全国平均206人、OECD平均330人)





滋賀医科大学

「地域に支えられ世界に羽ばたく」

- 昭和50年開学
- 卒業生 医学科2613名、看護学科681名
 うち、滋賀県で医療・看護にたずさわっているもの
 医師 951名 (医大327名+624名)
 看護系 187名 (医大100名+87名)

滋賀県の医療福祉の全国的な位置づけ

項目	データ (H17. 10. 1現在)		都道府県順位
	全国	滋賀県	
●施設数(10万対)			
・病院	9,026施設(7.1)	63施設(4.6)	46位
<一般病院>	7952施設(6.2)	56施設(4.1)	45位
・一般診療所	97,442施設(76.3)	913施設(66.1)	40位
・歯科診療所	66,732施設(52.2)	544施設(39.4)	44位

項目	データ (H17. 10. 1現在)		都道府県順位
	全国	滋賀県	
●人口10万対病床数			
・病院総数	1,276.912床	1,071.0床	41位
<一般病床>	707.7床	693.1床	35位
<療養病床>	281.2床	193.5床	39位

(厚労省「医療施設調査」)

どうして地域医療へのモチベーションが落ちるのか？

医師の都市志向

結局は

不安

から

・地方大学の地域特性の低下

・医大ならどこでもいい。将来は東京で。

・医療スキル獲得に対する不安

・地方において研修終了までに必要な疾患を担当できる

・地方において、最先端医療から遅れるのではない

・サポート体制不備による孤立の不安

・訴訟への不安

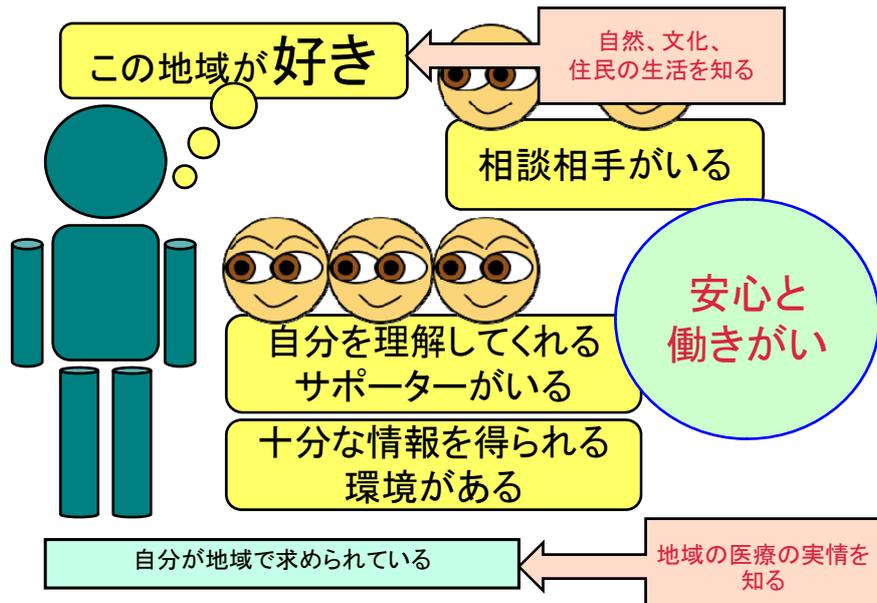
・自分が病気をしても代替りの医師がいない

・コンサルトする専門家がない

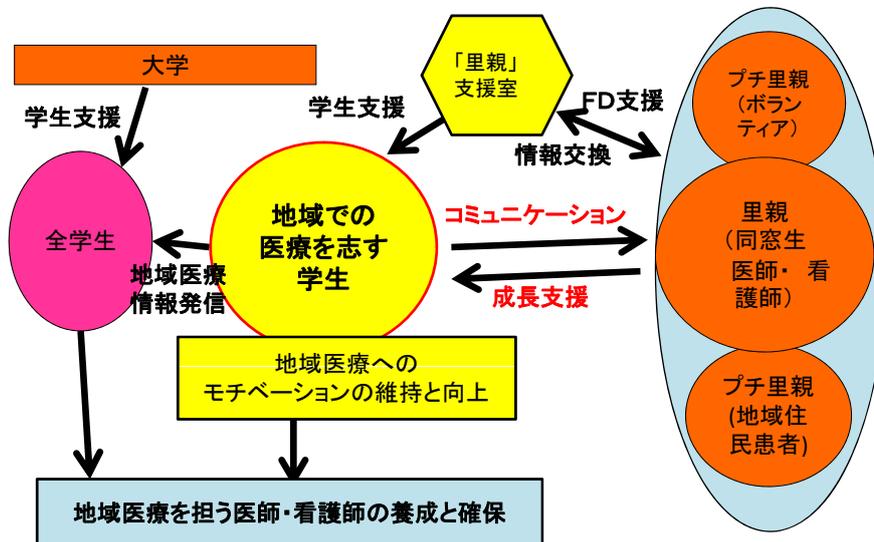
・オーバーロード、オーバーワークへの不安・不満

先輩の活躍する姿が不安解消につながる

地域に医師を残すには



地域「里親」医学生支援プログラム



支援事業の柱

- 1 「里親」「プチ里親」の募集と学生への案内
説明会から始まり、活動を重ねることで、より具体的に
- 2 学生と里親のマッチング
学生を紹介する段階で気づいたこと
- 3 自然や文化・歴史や住民の生活の魅力を学生に伝える
研修旅行に挑戦
現地だからわかることを重視
- 4 教職員、里親、プチ里親が学生を理解する
教職員向けFDから、合同FDへ
広報誌によるFD内容の紹介
- 5 医学教育や地域医療について大学と地域の認識共有
里親を講師に教職員向けFD
里親・プチ里親向けFDや市民講座
- 6 学内外への支援事業の周知・広報活動
県民に対して「里親」支援事業の目的の周知と協力要請
学内の幅広い教職員の協力や応援を要請

里親登録学生の年次推移

	2008年度登録者		2009年度登録者		計
		1年生	1年生	2年生	
医学科	女	11	13	2	26
	男	5	9	1	15
	医計	16	22	3	41
看護学科	女	2	5	0	7
	男	0	2	0	2
	看計	2	7	0	9
	合計	18	29	3	50

実施成果

- 1 学生が、地域の魅力に気づき始めている
都会にはない魅力
- 2 学生が、地域住民にとっての医療の役割を理解し始めている
生活を支え、生活と一体化した医療活動に触れる
- 3 里親が「生き生き」と活動する姿から刺激を受けている
医師としての働きがいを語る里親
診療、研究、家庭・子育てについて語る里親
- 4 プチ里親の言葉から素直に学んでいる
患者から医学生・看護学生への言葉
地域住民から医学生・看護学生への言葉
- 5 教職員の地域社会に対する理解がすすむ
学生と同じように「成長」
- 6 地域社会の大学に対する見方がかわる
自治体の姿勢がかわりつつある
県民の姿勢が変わりつつある・応援の現金書留とどく

今後の課題

- 1 学年進行に合った「里親」との交流や支援事業内容
- 2 学生のコミュニケーションへの支援
- 3 GP終了後の支援事業のありかた